奈良時代の石山寺仏堂における 屋根造作に関する研究

ROOF CONSTRUCTION IN ISHIYAMADERA-TEMPLE DURING NARA PERIOD

小野緋呂美 — * 1 高田圭祐 — * 2
小岩正樹 — * 3

Hiromi ONO — * 1 Keisuke TAKADA — * 2
Masaki KOIWA — * 3

キーワード：
日本古代, 奈良時代, 建築生産, 石山寺, 復元, 屋根

Keywords:
Ancient Japanese, Nara period, Architectural production,
Ishiyamadera-temple, Restoration, Roof

The documents about the construction of Ishiyamadera-temple during the Nara period still exist, and the restoration research of the main hall has been examined. This paper focused on rafters and angle rafter and tried to restore the roof by examining document and drawing. The grade can be calculated from the dimensions of the listed rafter, and the advanced estimation of the material used for the main hall. As a conclusion, it is thought that the roof type was a hipped roof, and discovered the process of construction in ancient periods.

1. はじめに

正倉院文書に残る天平宝字5年から6年(761-762)にかけて行われた石山寺の拡張造営を記録した造石山寺所関係文書は部材寸法や工人記録、帳簿等の古代における建築生産に関わるあらゆる記録が残存している貴重な資料群である。この資料から奈良時代における石山寺の復元研究を進めることは古代建築技術の解明への一助となり、同時代遺構の復元研究の手立てとなると考える。

奈良時代における石山寺拡張造営の中でも仏堂^{注1)}に関する研究は、福田敏男氏によって平面形式、柱径、屋根形式等の全体の復元研究がなされたが、屋根形式に関しては桁行五間・梁間二間の旧堂から身舎の屋根が底の屋根と分かれた屋根形式への変更であるとしている^{注2)}。その後、茅負検討^{注3)}によって、身舎の屋根が底の屋根と分かれた屋根形式は誤った指示であり、良弁による改作指示があったことから旧堂→(底の屋根と分かれた屋根形式の作堂指示)→新屋根となったことが明らかとなっている。

本稿は部材検討が進んでいない垂木、隅木を中心とする屋根部材の一部を文書及び作図によって検討することにより、完成した奈良時代における石山寺仏堂の屋根造作の復元を試みるものとする。

尚、本稿における文書読解は、岡藤良敬著『日本古代造営史料の復原研究—造石山寺所関係文書・史料篇』(法政大学出版局、1985年3月刊)を基に行っている。同書内の本文翻刻においては東京大学史料編纂所編『大日本古文書 編年之部』に収録されている史料を基にしているため、引用した文書には岡藤氏による資料名のほか、大日本古文書所収頁・編成別(表中の所在、一部注釈)を記載した。

2. 軒の出に関する検討

隅木長さの検討をするにあたり、軒の出の長さが必要なため、茅負の復元研究による軒の出の検討を行なった。軒の出の検討に当たっては茅負検討^{注3)}を基に、継手長さの検討を加えることで軒の出を算出した。

茅負の長さは継手を考慮しないと桁行88尺・梁行57尺となるが、古代の継手に関して、唐招提寺金堂の頭貫は相欠で平均当初尺1.3尺、唐招提寺講堂の桁は鎌継0.9尺となっており、継手はおおよそ1尺と考えられる。この継手を考慮すると、桁行85尺・梁行55尺となり、どちらも軒の出(庇柱芯から茅負端部まで、図2参照)は7.5尺(桁行 $(85-70)/2=7.5$ 、梁行 $(55-40)/2=7.5$)と推測される。

図1 継手を考慮した場合の長さ

図2 軒の出長さ

3. 正倉院文書における検討

本稿では、正倉院文書に残る造石山寺所関係文書として作材指示が記載されている「公文案帳」^{注4)}、材の制作及び運搬記録である「田上山作所告朔解」^{注4)}、作材記録のまとめである「造石山寺告朔解案(春季告朔)」^{注4)}「造石山院所解案(秋季告朔)」^{注4)}、収納記

¹⁾ 早稲田大学大学院創造理工学研究科 修士課程・学士(建築)
(〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1)

²⁾ 早稲田大学大学院創造理工学研究科 博士後期課程・修士(建築)

³⁾ 早稲田大学理工学術院 准教授・博士(工学)

¹⁾ Master Student, Graduate School of Creative Science & Engineering, WASEDA Univ., M. Architecture

²⁾ Doctoral Student, Graduate School of Creative Science & Engineering, WASEDA Univ., M. Architecture

³⁾ Assoc. Prof., Faculty of Science and Engineering, WASEDA Univ., Dr. Eng.

録である「雑材并桧皮和炭納帳」^{注4)}を中心に材の選定を行う。以降、表上部に特記無き限りは5点の文書から引用した。

3-1. 隅木に関する検討

隅木は文書において「角木」と表され^{注5)}、5種の材が確認される(表1)。しかし、2材(隅木4、5)は秋季告朔の「廻漕」でのみ出ている材であり、石山寺まで運ばれた記載がないため、隅木1-3の3種の材での検討を行う。

表1 隅木の記載一覧(日付は全て天平宝字6年)

番号	長 (尺)	広 (寸)	厚 (寸)	形状	数量 (枝)	作材指示日 (数量(枝):日付)	収納日 (数量(枝):日付)	所在
隅木1	20	8	7		4	日付不明(正月告朔に記載有)	4月29日	5-91, 15-284
隅木2	21	6	5		4	2月8日	記載なし	15-151
隅木3	24	7	5.5	5尺入尻3寸	4	3月16日	3月24日	15-168, 15-273
隅木4	21	7	6		5	不明(廻漕の記載有)		5-263
隅木5	15	7	6		1	不明(廻漕の記載有)		5-263

工程による隅木の作材時期の検討を行うため、石山寺の造営記録をまとめたものが表2である。

表2 石山寺の造営記録(公文案帳を基に作成)

日付(天平宝字6年)	内容	所在
2月8日	仏堂用柱・桁の作材指示	15-151
3月10日	仏堂着工	15-156
3月13日	身舎柱の柱立て完了	15-166
3月16日	「飛炎棉栢」10材の作材指示	15-168
3月17日	石山寺に良弁着	15-168,169
3月19日	良弁による棉栢の改作指示	15-170
3月21日	棉栢4材追加作材指示	15-171
3月30日	棉栢14材収納	15-275
4月中旬	屋根檜皮葺完了	注6

仏堂の造営は天平宝字6年3月から始まり、8月には完成していた。また、4月中旬には檜皮葺が完了していることから3月中には隅木は取り付けてあったと推測できる。ここから、隅木1は収納日が4月29日であり、檜皮葺が終わった後の収納となる為、仏堂以外の作材と考えられる。

また、柱と同日に指示されている長21尺4枝の隅木(隅木2)はこの記録以降登場しないため、使用されているかは確定できない。長24尺4枝(隅木3)は3月16日に作材指示が行われ、寺家まで運ばれた記録もあるため、使用された可能性が高い。2月8日及び3月16日の作材指示記録では、どちらも仏堂に使うための材と記載されているが、3月19日の良弁による屋根形式の改作指示前であるため、隅木2、3のいずれも使用が確定したとは言えない。

表3 垂木の記載一覧(日付は全て天平宝字6年)

番号	長 (尺)	幅 (寸)	丈 (寸)	形状	数量 (枝)	作材指示日 (数量(枝):日付)	収納日 (数量(枝):日付)	特記事項	所在
垂木1	24	4	4	6尺入尻3寸	66	2/28	34:3/30、9:5/10、15:5/16、8:5/19	五丈殿の材	15-155,285,286
垂木2	24	4	4	6尺入尻2寸	65	2/28	6:3/8、40:3/15、13:3/20、6:3/24	五丈殿の材	15-155,267~273
垂木3	16	3	3	尻3寸	60	記載なし	60:4/29		15-284
垂木4	16	3	3	直	140	記載なし	140:4/29		15-284
垂木5	16	3	3	直	113	30:3/21	10:2/7、29:2/23、63:3/2、12:3/30		15-171,263~275
垂木6	15	3	3	直	88	60:3/16、19:3/30	38:3/24、22:3/30、22:4/5、3:4/22、3:5/2		15-168,178,273~285
垂木7	12	3	3	直	3	4:3/30	3:4/5		15-178,15-281
垂木8	11	3	3	直	8	8:3/30	8:4/5		15-178,15-281
垂木9	10	3	3	直	12	12:3/30	12:4/5		15-178,15-281
垂木10	9	3	3	直	8	8:3/30	8:4/5		15-178,15-281

この文書検討から仏堂隅木の作材の種類として①身舎の屋根が庇の屋根と分かれた屋根形式を想定した材、②新屋根を想定した材の2種があることが判明した。

以上より、この2種8枝(隅木2、3)及び旧堂の隅木4枝を候補材として検討を行う。

3-2. 垂木に関する検討

文書において、垂木は「架」と記載され^{注5)}、棉栢(木負、茅負を指す^{注5)})の構成から二軒と考えられるが、文書には地垂木、飛檐垂木の区別はない。

5つの文書より、垂木は反り違いも含めた10種が確認され、(表3)長さとしては24尺、16尺、15尺、12尺、11尺、10尺、9尺が挙げられる。地垂木長さは、端部の想定を行うため木負長さの検討を行いたい、旧材が使われている^{注3)}とされており、ここでの検討は不可能である。文書に戻り、天平宝字6年2月28日の公文案帳^{注7)}には「架一百廿枝^{各長一丈四尺 方四寸 隅二寸 六尺}(中略)右、爲用可急作五丈殿架」の記載があることから24尺材(垂木1、2)は五丈殿の材と考えられる。よって仏堂の垂木候補材は16尺材、15尺材、12尺材、11尺材、10尺材、9尺材(垂木3-10)が考えられる。また、表3の垂木3-10の作材指示日を見ると、3/16,3/21,3/30となっており、隅木の指示記録とも近い日程で作材指示をしていることがわかる。

天平宝字6年3月16日の公文案帳^{注8)}を見ると、「一 架六十枝^{各長一丈五尺 方三寸}」が隅木24尺材4枝と同時に作材指示されていることがわかり、「仏堂用度如件」と書かれていることから仏堂の垂木として15尺材が作材されていたことがわかる。しかし、この指示は3月19日の屋根改作指示以前であり、15尺材が実際に仏堂に使われたかは不明である。また、9尺材、11尺材は8枝、10尺材は12枝、12尺材は4枝(3本収納)を作材指示し、収納されている。これらは本数の点から隅の垂木(図3イ)と考えられ、この4種の材は隣接していることが考えられる。

よって、身舎柱間に入る地垂木(図3ア)は15尺材、16尺材の2通りが考えられる。

図3 垂木名称凡例

3-3. まとめ

以上の文書検討から、隅木候補材は長 21 尺材 4 枝、長 24 尺材 4 枝の 2 種 (隅木 2、3) と旧材、垂木は身舎柱間に入る地垂木候補材が長 15 尺材方 3 寸、長 16 尺材方 3 寸の 2 種 (垂木 3-6) と旧材、隅の垂木は長 12 尺材、11 尺材、10 尺材、9 尺材 (いずれも方 3 寸) の 4 種 (垂木 7-10) が選定された。続いて作図検討をすることによって材を選定する。

4. 作図検討

4-1. 地垂木勾配に関する検討

石山寺仏堂では前述した垂木に関する文書検討より長 9 尺材、10 尺材、11 尺材、12 尺材の垂木は隣接していると仮定できる。ここから地垂木勾配を算出し、隅木長さを求める検討を行いたい。

まず、地垂木勾配の算出方法を検討する。隣り合う二本の垂木の長さを X_1 、 X_2 とすると、それぞれの正射影の長さ ($X_1 \cos \theta$ 、 $X_2 \cos \theta$) の差が一枝寸法に当てられる (図 4、5)。

よって、(一枝寸法) = $X_2 \cos \theta - X_1 \cos \theta = (X_2 - X_1) \cos \theta$ と表すことができる。

また、表 4 の参照遺構^{注9)}の垂木勾配より、地垂木勾配が 4 寸 5 分から 5 寸勾配を取り、その時の $\cos \theta$ の値は 0.9 近傍を取ることがわかる。

一枝寸法から地垂木勾配を計算するにあたり、

柱間一間 / 一枝寸法 = 完数…①を用いることが必要である。

隅では誤差が生じる可能性があるため、柱間一間で算出した値を用いる。

図4 隣接する垂木長と勾配、一枝寸法

図5 隣接する垂木長と一枝寸法の関係

表4 参照遺構の垂木勾配

選定建物	地垂木勾配	$\cos \theta$
新薬師寺本堂	4 寸 5 分	0.91
唐招提寺金堂	5 寸	0.89
唐招提寺講堂	4 寸 5 分	0.91

図6 石山寺復原想定見上図 (11 枝の場合)

①式：

石山寺仏堂では柱間は 10 尺であり、この時、結果を完数値とし、且つ $\cos \theta$ が 0.9 尺近傍を取り、一枝寸法が 0.9 尺～1 尺程度とすると、柱間に入る垂木は 10 枝または 11 枝となる。

【10 枝の場合】

$$(X_2 - X_1) \cos \theta = \text{一枝寸法} \quad 1.1 \text{ 尺} \times 0.9090 = 1 \text{ 尺}$$

$$\text{柱間} / \text{一枝寸法} = \text{完数} \quad 10 / 1 = 10$$

【11 枝の場合】

$$(X_2 - X_1) \cos \theta = \text{一枝寸法} \quad 1 \text{ 尺} \times 0.9090 = 0.9090 \text{ 尺}$$

$$\text{柱間} / \text{一枝寸法} = \text{完数} \quad 10 / 0.9090 = 11$$

どちらの場合でも $\cos \theta = 0.9$ 近傍となり、地垂木勾配は 4 寸 6 分勾配となり、表 4 と比べても妥当である。

また、(庇柱から茅負までの長さ) / 一枝寸法 = 完数の関係、隅木広さを用いて作成した見上図の一部が図 6 である。この図により、隅の一枝寸法 1.071 尺、枝数 7 が想定される。

地垂木勾配を利用し、隅木長さを算出するため、地垂木、庇柱、木負の関係を整理する。

隅の飛檐垂木が 7 枝であることから、地垂木は枝数 4 または 5 枝が想定される。(図 7)

・ 4 枝のとき

(木負から庇柱までの長さ) = 4.28 尺

・ 5 枝のとき

(木負から庇柱までの長さ) = 5.36 尺

図7 4枝、5枝の場合の垂木と隅木の関係

4-2. 隅木の作図検討

4-2-1. 地隅木の検討

・ 4 枝のとき (図 8)

地垂木長さは、 $(10 + 4.28) / 0.909 = 15.71$ 尺となる。一枝寸法は地垂木勾配から算出しているので、地垂木勾配 0.459 を用いると、14.28 尺に対し、6.55 尺上がる。

この高さを隅木勾配として用いると、

$$\sqrt{14.28^2 + 6.55^2} = 21.17$$

21.17 尺となり、24 尺材が妥当と考えられる。

図8 4枝の場合の垂木と隅木の関係 (単位は全て尺)

・5枝のとき(図9)

地垂木長さは、

(10+5.36)/0.909=16.90 尺となる。

地垂木勾配 0.459 を用いて、

15.36 尺に対し、7.05 尺上がる。

この高さを隅木勾配として用いる

と、

$$\sqrt{15.36^2 + 7.05^2} = 22.77$$

22.77 尺となり、24 尺材が妥当と

考えられ、4 枝、5 枝ともに地隅木は 24 尺材が適切であると考えられる。

図9 5枝の場合の垂木と隅木の関係 (単位は全て尺)

4-2-2. 飛檐隅木の検討

断面寸法の妥当性による検討を行う。地隅木を 24 尺材とした場合、飛檐隅木には 21 尺材または旧材 (14 尺以上) が使用されることとなり、

地隅木 24 尺材 (広 7 寸厚 5 寸半) — 飛檐隅木 21 尺材 (広 6 寸厚 5 寸)

地隅木 24 尺材 (広 7 寸厚 5 寸半) — 飛檐隅木旧材

の組み合わせが考えられる。

隅木の断面寸法においては広さ (幅) が変わることは考えづらく、また 21 尺材の納入記録がないことから使用の可能性は低いため、飛檐隅木は旧材を利用したと考えられる。

4-2-3. 隅木からみた屋根形式の考察

地隅木 24 尺を用いて屋根形式の検討を行う。

寄棟造では二本の隅木が梁筋上にくることが村田氏^{注9)}によって指摘されており、今回の場合、28 尺以上が適する。この場合、24 尺材の他に材を継いだと考えられるが、地隅木に継いだ材の記録は見つからなかった。入母屋造の場合、作図上は 24 尺材単独で使われたと言え適する。

表5 破風の記載一覧 (日付は全て天平宝字 6 年)

番号	長 (尺)	厚 (寸)	広 (寸)	形状	数量 (枝)	作材指示日 (数量: 日付)	収納日 (数量: 日付)	所在
破風1	24	5	8	6尺入テウ3寸	4	4:2/28	3:3/24、1:5/16	15-155,273,286
破風2	20	4	7	直	4	記載なし	4:3/20	15-271
破風3	17	4	9	記載なし	4	記載なし	2:3/2、2:3/8	15-266,267
破風4	16	4	6.5	4尺入テウ3寸	4	4:3/4	4:3/20	15-158,271
破風5	12	2.5	6	記載なし	4	4:4/7	4:4/22	15-184,281

表6 同時代遺構の垂木寸法、垂木配置

建物名	建立年代	平面形式	屋根形式	垂木	地垂木	飛檐垂木	一枝寸法
法隆寺金堂	670 年代	初重身舎三間二間 (高麗尺 9 尺)、底高麗尺 6 尺、上重桁行中央二間 (高麗尺 8.622 尺)、梁行中央間 (高麗尺 8.25 尺)、隅間 (高麗尺 8.25 尺)	二重 (上角垂木平行一軒重入母屋造)	二軒	高 4.8 寸厚 4 寸	なし	高麗尺 7.5 尺
法隆寺食堂及び細殿	奈良時代	桁行天平尺 70 尺、梁間 32 尺	切妻造	二軒	高 4 寸厚 3.9 寸	高 3.4 寸厚 3.1 寸反有	記載なし
新薬師寺本堂	天平 19 年 (747) ごろ	桁行七間梁間五間、桁行中央間 16 尺、他 10 尺	入母屋造	二軒	円垂木	角垂木	当初尺 1 尺
東大寺法華堂	天平勝宝元年 (749) 以前	正面八間側面五間、身舎正面三間 14 尺、側面 12 尺、底 10 尺	入母屋造	記載なし	記載なし	記載なし	9.4 寸
法隆寺東院伝法堂	天平宝字 5 年 (761) 以前	身舎七間底二面、桁行 (東より 1.4, 5 間) 11.74 尺他 11.825 尺、梁間 8.805 尺 (天平尺 9 尺)	切妻造	二軒	高 4 寸厚 3.7 寸反有	記載なし	記載なし
唐招提寺講堂	天平宝字 4、5 年 (760, 761) ごろ	正面九間側面四間、身舎一間平均 0.98 × 13 尺、底 0.98 × 11.2 尺	入母屋造	二軒	高 4.4 寸厚 4 寸	高 4.4 寸厚 4 寸	桁 0.98 尺、梁中央 1.11 尺、隅 1.16 尺
唐招提寺金堂	宝亀年間 (770-781)	身舎五間四面、桁行中央間 16 尺両隣 15 尺身舎端間 13 尺底 11 尺、梁間身舎一間 13.5 尺底 11 尺	寄棟造	二軒	円、4.6 寸	直	当初尺 1 尺

しかし、入母屋造を想定した場合、破風の使用がある。表5は破風の記録一覧である。このうち、屋根の改作指示である 3 月 19 日以降に納入され、5-1. に記述するように屋根葺が 4 月上旬に始めると想定できるので 20 尺及び 16 尺の 2 種が考えられる。しかし、20 尺材は直材であるため入母屋造の破風とは考え難い。また 16 尺材は指示日が改作指示前で、収納が改作指示翌日であることから仏堂で使われた可能性が低いと考えられる。

よって入母屋造の可能性は低く、寄棟造を想定して検討を進める。

4-3. 垂木に関する検討

4-3-1. 地垂木に関する検討

4-2-1. での地隅木、地垂木の模式図検討より、庇柱から先の地垂木が 4 枝の場合は 15.71 尺、5 枝の場合は 16.90 尺が最低でも必要である。(図 7、8) 候補材は 15 尺材または 16 尺材であるため、庇柱から先の地垂木が 4 枝が適当と考えられ、16 尺材が身舎柱間に入る地垂木と作図検討では考えられる。

4-3-2. 飛檐垂木に関する検討

飛檐垂木の検討を行うにあたり、遺構を元に垂木の端点および長さを算出する。表6は同時代における垂木寸法の一覧である。

このうち、復原矩計図のあった唐招提寺講堂の垂木長さを実測したところ、

(地垂木)18.48 尺 (飛檐垂木) 9.99 尺

となる。地垂木は柱間一間の違いから長さの検討に大きく差が出ているが、身舎柱上まできていることに重点を置き、先の作

図10 唐招提寺講堂復原矩計図

図検討を重視する。飛檐垂木においては、内側の端部の位置の決定によって長さが決定されているととらえることができる。

唐招提寺講堂（図 10）の場合は、大斗端で規定していると考えられ、長さのみを考慮すると、9.99 尺という値をとっており、9 尺材、10 尺材が適する値ではあるが本数の点からもこれらが使われた可能性は低く、旧材、または 15 尺以上の収納材を加工して使用したと考えられる。

5. 垂木の本数に関する検討

5-1. 他材の記録による工程検討

「雑物用帳」^{注4)}より釘の納入記録を見ると、3月24日から4月2日まで断続的に「底架」用の釘が納入されていることがわかる。^{注11)}この底架は、底部分に取り付ける垂木と考え、地垂木のことで想定できる。また、4月6日は「架」の釘と記載され、区別はつけられていないため地垂木及び飛檐垂木両方のことを指す可能性が指摘できる。以上より3月24日から4月6日近辺で垂木の取り付けが行われた可能性が指摘でき、表3の16尺材（垂木5）の収納日が隅の地垂木（垂木7-10）の収納日より早いことから身舎柱間に入る地垂木→隅の地垂木の順で取り付けられたと考えられる。

次に同文書より檜皮及び黒葛の納入記録を見ると、3月28日に仏堂の黒葛の納入が始まり、4月10日まで断続的に続く。^{注12)}檜皮に関しては仏堂と決定していないが、同時期に納入されていることが判明し、「公文案帳」では僧房と合わせて作材の指示も出ていることからこの時期に屋根葺が行われていると推測できる。4月12日以降からは藁の作材指示があり^{注13)}、仏堂の壁面を塗る作業が始まると考えられ、4月6日から12日頃までに垂木は配し終わっていると考えられる。また、仏堂の作材指示の始めと考えられる柱は桁、隅木とともに2月8日にされており、それ以降に垂木の作材指示及び納入がくると考えられる。

このことから16尺材垂木の収納記録（表3）を見ると、2月23日29枝（垂木5）、3月2日62枝（垂木5）、3月30日12枝（垂木5）の計103枝が仏堂に使われた可能性が高い。垂木3、4は収納日が4/29のため、垂木5のうち10枝は収納日が2/7のため、いずれも仏堂以外の可能性が高い。また、15尺材は3月24日にも作材指示が出ているため、仏堂に全く使われなかったという見方は出来ないことと、隅の垂木の最長が12尺材3枝であることから15尺材88枝（垂木7）は隅や飛檐垂木に使われていたと推測できる。

5-2. 見上図による本数検討

図11は石山寺仏堂想定見上図である。3-2-1.での地隅木、地垂木の模式図検討を用い、12尺材がそのまま使用できるのは木負端部から11枝目までであることと15尺材がそのまま使用できるのが14枝目までであることから、材の分布は図11のようになった。これにより、16尺材は11枝×14間+1枝×8間=162枝または10枝×14枝+1枝×8間=148枝使用することがわかる。文書で確認できた本数は113枝のため、残りは旧材の可能性が指摘できる。また、15尺材は3×8=24枝が使われており、文書に記載されている88枝を考慮すると、88-24=64枝は地垂木の隅（図11の地垂木

のうち、白色部分）又は飛檐垂木に分割して使われたと推測できる。

6. 結語

本論考では、隅木と垂木の部材長及び形状を検討することにより、奈良時代における石山寺仏堂の屋根造作の工程を一部復原することができた。今後は工程のさらなる復元のため、足庭等工人記録の復元も進めていきたい。

図 11 石山寺仏堂想定見上図

参考文献

1) 福山敏男：日本建築史の研究，奈良時代に於ける石山寺の造営
桑名文星堂 1943.10

2) 岡藤 良敬：造石山寺所関係文書・史料篇，福岡大学総合研究所報 (100)，
巻頭 p1-414, 1987.03

3) 村田健一：伝統建築を読み解く，学芸出版社，2006

注

注 1) 本稿では原史料に合わせて石山寺本堂を仏堂と呼ぶ。

注 2) 福山敏男：日本建築史の研究，奈良時代に於ける石山寺の造営
桑名文星堂 1943.10

注 3) 小岩正樹：良弁の石山寺造営における改作指示について，日本建築学会学術講演梗概集 F2, pp.645-646, 2011

注 4) 石山寺文書研究は、福山氏が発端となり、その後を受けて岡藤氏によって基礎的研究は果たされている。今回は岡藤 良敬「造石山寺所関係文書・史料篇」を用い、正倉院文書の読解とした。以下の表が「造石山寺所関係文書・史料篇」に記載された資料名、日付、概要である。

表「造石山寺所関係文書・史料編」内容一覧

章	史料名	年月	概要	所在
1	田上山作所告朔解	天平宝字 6.1-6.4(月 1)	田上山作所における作材、運材、雑物、人物、給料の記録	15-344~348,5-77~83,5-114~124,5-148~160,5-221~229,15-463~465
2	甲賀山作所告朔解	天平宝字 6.1-6.4(月 1)	甲賀山作所における作材、運材、雑物、人物、給料の記録	5-86-94,5-95~102,15-462
3	造石山寺告朔解案(二月告朔)	天平宝字 6.3	田上山作所の 2 月における作材、運材、雑物、人物、給料の記録	5-137~139
4	造石山寺告朔解案(春季告朔)	天平宝字 6.1-6.4(月 1)	田上山作所の春季における作材、運材、雑物、人物、給料の記録	5-163~187
6	造石山院所解案(秋季告朔)	天平宝字 6. 閏 12	田上山作所の秋季における作材、運材、雑物、人物、給料の記録	16-186~215,219~222,227~252,15-127,5-335~354
7	公文案帳	天平宝字 6.1-7.2.18	石山寺から田上山作所にあてた作材指示記録、人員配置等に関する牒	5-385~386,15-85,137~234,243~254,16-1~3,118~120,25-246
9	雑材并絵皮和炭納帳	天平宝字 6.15-6.7.22	木材、檜皮、葛等の収納記録	15-258~289
10	鉄充并作上帳	天平宝字 6.1.16-6.8.3	鉄物収納記録	5-60~62,15-292~306
12	雑材并絵皮和炭用帳	天平宝字 6.1-6.10.1	木材、檜皮、葛等の収納記録	15-365~374
8	雑物収納帳	天平宝字 5.12.26-6.2.26	その他の収納記録	4-537~539
5	労働文案	天平宝字 6.8.27	主に官人の名簿及び出勤記録	15-235~242
11	銭用帳	天平宝字 5.12.24-7.1.30	出納帳	4-532~536,5-355~371,15-442~452,457~460
13	雑物用帳	天平宝字 6.1-6.7.27	その他の収納記録	15-365~374
14	食物用帳	天平宝字 6.1-6. 閏 12.29	食料の記録	5-5~22,24~30,15-43616-177~178
15	雑様手実帳	天平宝字 6.3.3-6.8.9	雇工給料記録	5-220,239~240,261,15-357~364

【備考】
田上山作所：滋賀県大津市南部に位置する山間部に作られた木材伐採・加工の為の施設
告朔：造東大寺司に提出するための報告書
甲賀山作所：滋賀県甲賀市に位置する山間部に作られた木材伐採・加工の為の施設。田上山作所の前に使われていた
春季：旧暦 1 月から 3 月のこと
秋季：旧暦 7 月から 9 月のこと

注 5) 福山敏男：正倉院文書に見える建築用語，正倉院年報 8, 1986.3

注 6) 大日本古文書 15-322~326

注 7) 大日本古文書 15-155

注 8) 大日本古文書 15-168

注 9) 同時代(8 世紀前後)の堂うち、復元形式が判明しているものを選定した。

注 10) 村田健一：伝統建築を読み解く，学芸出版社，2006 を参照すると、唐招提寺金堂の平面より寄棟造の構造的制限について、「隅木の上端を支持する必要上、正面側の隅木と、背面側の隅木の交点がほぼ梁筋に合う必要があること」と指摘している。

注 11) 大日本古文書 15-320~323

注 12) 大日本古文書 15-322~326

注 13) 大日本古文書 15-326

図版典拠

図 1-9,11 筆者作成

図 10 奈良県教育委員会：国宝唐招提寺講堂他二棟修理工事報告書，1972

表 1-6 筆者作成

[2019 年 6 月 5 日原稿受理 2019 年 8 月 20 日採用決定]